

日本出版文化協會が良書として、本書を推薦したのも、この故に推察せられる。

只、本書を一讀して感ぜられることは、文體用語に古調が多く、一般の讀者には、理解が困難ではないかと思はれることである。これは著者が、事實を記述するに當つて、その根據とせられた史料の記述と、背離しないために、史料の原文をなるべくその儘に使用せられたそれに依るのであらうが、現在の如く出版界の情勢が往時とは異なつて、少數の學者の研究の利便と云ふよりは、一般の教養昂揚に、主目的を置くことを要求せられてゐる時には、今後は史學専門の著書であつても、行文はなるべく平易にし史料の考證などで、餘り専門的に互るものは、本文を擧げず、史料の記述でも、部分的であつて、そのまゝでは大勢を伺ひ得ないものも除き史料の原文、その解釋、批判等は、別編に纏めたならば、教養、研究相互に便利ではないかと考へられる。本書の如き専門書が推薦せられた機會に、これを提唱する次第である。(東京刀江書院發刊、B五版、四九八頁。定價五圓五〇錢)(赤松)

中世の社寺と藝術

森 末 義 彰 著

この書物は東京叢書房の企劃にかゝる、叢書史學叢書の第一冊として、學界注視の期待のうちに、華かに刊行せられたものである。この史學叢書は辻善之助先生と本書の著者森末義彰氏を編

輯顧問として、東大史料編纂所關係の俊英學士十三氏の近業を選集せられたもの、その種目は國史學のあらゆる部門に互つてをり今後陸續として出版せられる筈であるが、これらの權威ある好著のかず／＼は、逐次本欄にその輪廓を紹介されることであらう。さて本書は、中世の藝術が中世人の精神生活の源泉である社寺を母胎として生長發展したとの見地から、中世の藝術史はその社寺との關係を究明することなくして十分なる理解に到達し得ないとし、こゝに藝術及美術關係の座について、詳細に論攻せられたものである。第一部社寺と藝術關係の座に於いては、宇治猿樂・鳥飼猿樂・美麗田樂・散所が、第二部社寺と美術關係の座に於いては、南都繪所・附祈雨祈禱とその木尊圖繪の問題、及び長谷寺の炎上とその復興が論述されてみて、これらの特殊問題を通じて一般事情を窺知せしめるが如く仕組まれてある。こゝにその各篇について梗概を記述する紙面を有しないが、全篇を通じてその史料蒐集の甚だ廣域に互ること、その史料取扱の極めて合理的なること、この二點こそ本書の學問的價值を決定的ならしむるものであらう。

併しこの史料の合理的取扱は、時に實際事情と離反する危険がないでもない。一例を挙げると、宇治猿樂の奉仕した宇治離宮明神について、それが平等院の鎮守社であつたことを、氏は既定の事實の如く繰返へし説かれてゐる。これは恐らく中右記長承二年五月八日の「宇治鎮守明神離宮祭也云々」の記事から、合理的に考察せられたものに相違ないと思ふが、實際はこの「鎮守」が宇治及

榎島兩村落のそれを指してゐることを誤解されたのではなからうか。この祭禮が「宇治遷下人祭」とは、この日の記事にも記してゐるところで、この社が藤原氏惹いては平等院との關係を生じたのは、むしろ其後に屬すると思ふし、また嘗つて本社が平等院の「鎮守」であつた事は、寡聞にしてその證あるを知らない。

それはさてをき、本書收むる七篇の論稿は、何れも眞率にして質實なる考察ならざるはなく、それ／＼嘗つて研究雜誌に連載され、當時の學界を賑はせたものであるが、今また新なる大環の一鎖として組立てられたるを見れば、再び鮮かな印象を受けるのである。諸篇のうち「散所」の一篇は、藝能以外にも多くの課題を含むものとして、就中學界を啓發するものであらう。(A5版上製五一七頁、昭和十六年十一月發行、誠僑書房刊) (林屋辰三郎)

宋代茶法研究資料

佐 伯 富編

支那に於ける飲茶の風習は唐に至つて普及一般化し、その需要が頗る加増するに至つて、こゝに商品としての茶、課税の對象としての茶が大いに注視される様になつた。唐の徳宗の時をはじめ茶税が設けられ、また文宗の時、玉漉なるものが一時專賣制を布いたと言はれてゐる。この茶に對する課税專賣を普通「權茶」と言ひ、その權茶のためのあらゆる制度規則を「茶法」と言つてゐる様である。この茶法は宋代に至つて整備されるが、これは宋が契丹

西夏等との外戦のため、財政窮乏し、國防費の補充調達に憚んだ結果、茶・鹽の如き生活必需品を專賣制に附してその利を收めんとし綿密なる制度規則を設置した事による。しかし、どちらかと言へば鹽の專賣が國家財政上重要な地位を占めたに對し、茶は國防上重要な意義をもつてゐた。國防上に於ける權茶の利用は外民族の懷柔策、茶馬の交易、軍糧漕運入中等の問題に分つことが出来る。此等の諸問題を攻究する事は、外民族と宋との密接なる關係、更にこの不可分の關係より惹起せらるゝ諸種の社會問題の性質、支那四周の諸民族の民族的自覺、乃至近世以來次第に發展し來る商人の社會・政治上に於ける地位勢力等々、凡そ近世史に於ける重要な諸問題を解明出來るのである。従來宋代の茶法に關しては加藤繁博士をはじめ山中忠夫氏、松井等氏、曾我部靜雄氏、佐伯富氏等の貴重な研究もなされてはゐるが、いづれも茶法の一部分的な研究若しくは茶法を中心とした社會上の一問題を捕捉したに止まり、茶法それ自身についてなほ今後大いに攻究を要する方面もあるのである。

かゝる際、佐伯富學士の宋代茶法研究資料の發刊を見たことは、單に茶法研究の前途に一大便益と恩恵とを與へると言ふに止まらず廣く一般宋代近世の財政・社會・經濟の問題を專攻せる人々にとつてはこの上なきにして力強き、手引となるであらう。本書は同學士がさきに東方文化研究所々員たりしとき、昭和十年春以來二ヶ年餘を以つて資料の蒐集にあつて更に略々同じ歳月を印刷校正に費し、文字通り心血をそゝいで成つた無慮千數百頁、四六